HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	スピノザの実体一元論 : M. Gueroult「発生的定義」批判を手がかりに (1)
Author(s)	柏葉, 武秀
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 104, 23-54
Issue Date	2001-06-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33997
Type	departmental bulletin paper
File Information	104_PR23-54.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

スピノザの実体一元論
——M. Gueroult「発生的定義」批判を手がかりに (1)

柏葉武秀

はじめに
第一節 問題の概要
第二節 『短論文』の実体—属性論
第三節 属性解釈の論争から「発生的定義」へ (以上本号)
第四節 「発生的定義」批判
第五節 神の唯一性
第六節 属性の「無限の多さ」
むすびにかえて

はじめに

『エチカ』第一部は「神について」との副題をもっている。だが、スピノザは神から出発することはなかった。定義においては自己原因からはじまって、実体、属性および様態といったカテゴリーの定義が述べられた後に、定義七で「絶対無限の存在者」「各々が永遠・無限の本質を表現する無限に多くの属性からなる実体」との神の定義が登場する。さらに神の存在を証明する定理にいたっては、七つの公理と一〇個の定理を経てようやく到達できることになっている。この「神の遅れた出現」[注1]にスピノザによる神の存在証明の特徴が典型的に現れている。神が遅れて存在を証明され出現するというのは、少なくない論者を当惑させるに十分だとはいえ、[注2]幾何学的順序に従った叙述というスピノザの方法論からすると、理の当然というべきなのだろう。神の存在を幾何学をモデルに証明するからには、神の定義だけではなく、そのほかの諸概念を公理なり定理なりの形で介在させながら、論証手続きを踏む必要がある。この迂遠な論証の道にこそ、スピノザの特異性を主張できるかもしれない。スコラ哲学からデカルトに至るまで、単なる思弁の域にとどまっていた神の存在証明に、幾何学という堅牢な基盤を与えたのだと。

しかし、スピノザの自負を論述形式に見込む試みは、やはり早急にすぎる。神の存在証明がどれほど精緻で、巧妙な形態をとろうとも、証明されるはずのものは、あくまで神でなければならないし、ただ神だけでなければならない。そうでなければ、そもそも神の存在証明とは呼ばれえない。このような確認はあまりに自明であって、いまさら言挙げするまでもないと思われるかもしれない。スピノザ以外の哲学者についてであれば、そのとおりである。だが、ス

ピノザ哲学をいささかでも立ち入って論じようとするものは、スピノザが証明しているのは、本当に神の存在なのかを問い直さざるをえない仕儀に立ち至る。汎神論の代表格と目され、それどころかながく無神論と非難されてきたスピノザだからではない。ごく初期の著作や書簡から主著『エチカ』にいたる、スピノザ哲学の体系がかかる疑念を必然たらしめるのである。すなわち、スピノザがその存在を証明しようとしているのは、神ではなく、実体一般なのではないのか。

伝統的に実体とは、ごく日常的に知覚される諸々の事物である。たとえば、手元にあるペンや机は実体である。この実体は色や重さなどといった特質や属性を備えている。そういった特質の中でも、実体の定義となるようなものを本質と呼ぶことができよう。たとえば、水は氷であろうと、水蒸気であろうと、またコップを満たしていようと、大海をなしていようと、H_2Oという本質をもつというように。同じように一人の人間も実体であり、人間一般に妥当する本質あるいは属性をもつと考えることもできる。そうすると「二人の人間は二つの実体である」とみなすのが自然であるだろう(Ep3/11)。同時代の友人オルデンブルグがわざわざ常識的な実体理解を持ち出して、自説の丁寧な説明を求めたという事実が示すように、現存する最初期の書簡においてすでにスピノザは独特な実体観を表明していた。オルデンブルクが実際に受け取った書簡には、具体的な証明が記載された文書が添付されていたとされるが、その実物は残されていない。とはいうものの、スピノザが当該文書でどのように実体を定義していたかは容易に推測できる。直前のオルデンブルグ宛て書簡には次のような記述がすでに記されているからである。自然の中には同じ本質を備えた実体は一つしか存在せず、その実体の本質には存在が属しているうえに、すべての実体は自己の類において無限で最高に完全である(Ep2/8)。これらの実体についての諸規定を前にして、オルデンブルクがどれほど当惑したことか。

今日のわれわれもまた当惑せざるをえない。人間は、たとえば理性という同一の属性をもった二つの実体ではないのか。それらは有限な実体のはずである。なによりも、実体の本質に存在が帰属するとは理解しがたい。本来本質に存在が属しているのは、すなわち必然的に存在するのは、ただ神だけのはずである。実体すべてを「自己原因にまつりあげ」、それらがみな個々相互に独立自存させて、結局は「それだけ多くの神を作り上げる」ことになるのではないか。行き着く先は「万物の第一原因」の否定にほかならないのではないのか(Ep3/11)。実体を自己原因として規定し、その必然的存在を幾何学的に証明しようというスピノザの初発の意図が、一見奇妙にもみえる疑いを引き起こしてしまうのだ。スピノザは神ではなく、実体の存在を証明しようとしているのではないのか。

事実、スピノザは『エチカ』冒頭の諸定理において、実体という用語を二通りに使用している。つまり「それ自身において存在し、それ自身によって考えられる」(E1Def3)ところの実体と、神と同一視される「各々が永遠・無限の本質を表現する無限に多くの属性から成り立つ実体」(E1Def6)とである。自然の中には同じ属性を持つ実体は一つしかないこと(E1P5)から、その実体が自己原因であり、必然的に無限であることが論証されている。その一方で絶対無限の存在者(Ens)たる神は、無限に多くの属性からなる実体であり、この神こそが自然の中に存在する唯一のものである(E1P14C1)。スピノザがなにについて存在証明を試みているのかとの疑念は、こう述べなおすことができるだろう。すなわち、存在するのは『エチカ』第一部定義三の実体なのか、それとも定義六の無限に多くの属性をもつ実体すなわち神なのかという問題である。本稿は、スピノザ実体論に固有の「一と多」の問題圏を整理し、一つの解釈を提出することを直接の目的としている。

だが、本稿の問題設定自体が自明なものではない。従来、スピノザ形而上学における「一と多」の問題は、唯一の

神と無限に多くの属性との関係として論じられてきたからである。この神と属性の関係を、唯一の「無限に多くの属性をもつ実体」が無限に多くの「唯一の属性をもつ実体」によって構成される関係であると解釈したのがゲルー(Martial Gueroult)である。[注3] 手堅く精緻なテキスト理解に裏打ちされたいわゆる「発生的」解釈は、他の追随を許さない水準にあり、フランス語圏の外にまで広く受容されて、いまなお大きな影響力をもっている。本稿の具体的な批判対象はこのゲルーの解釈である。したがって扱う問題は、正確には実体論というよりも「実体―属性論」である。

ところで『エチカ』において二種類の実体を見出し、両者の関係を解明するという本稿の問題設定自体が、このゲルーの解釈によって生み出されているともいえる。ゲルーによれば、「自己の類において無限」である実体から「絶対無限の存在者」である神が構成されるという風に、『エチカ』の議論は進行している。すなわち、先の問いに即して述べなおすならば、定義三の実体が、神において統一されて、定義六の無限に多くの属性から成る唯一の実体が登場するかのように。しかし、問題はそれほど簡単には解決されない。

そこでまず初期の著作から『エチカ』までにおける、実体と属性に関するテキスト上のさまざまな諸規定をやや丁寧に紹介し、解釈上の難点を特定する。その後に、属性の解釈にまつわる論争を瞥見し、ゲルーの議論を紹介して一定の批判を加える。論述過程で、属性論とは別個に、もう一つの論点として浮上するのが、実体の唯一性である。「自然の中にただ一つ存在する」実体の「一つである」あり方を明確に理解する必要がある。属性をめぐる論争史上で、分かちがたく問われてきたのは、スピノザの存在論的一元論の妥当性だったからである。その上で、テキストのなしうる限り整合的な解釈を提示できるはずだが、その結果、考察の射程は単なる訓詁注釈にとどまらないことが確認されるだろう。無限に多い属性と、やはり無限実体とされる神との関係を、一つの哲学的無限論として読み解く可能性

が最後に示される。

第一節　問題の概要

『エチカ』では、実体と属性はそれぞれ次のように定義されている。まずは簡単に論証の筋道を押さえておく。

「実体とは、それ自身において存在し、それ自身によって考えられるものであると解する。すなわち、その概念を形成するのに他の概念を必要としないものである。」(E1Def3)

「属性とは、知性が実体に関してその本質を構成すると知覚するものであると解する。」(E1Def4)

さて、複数の物が互いに区別されるのは、実体の相異によるか属性の変様の相異によるしかありえない(E1P4)が、自然の中には、同じ属性(本性)を持つ実体は一つしかない(P5)。そして一つの実体が他の実体から産出されることはないので(P6)、実体は自己原因(causa sui)、すなわち「実体の本性には存在することが属する」(P7)のである。この実体は本性上存在する上に、同じ属性を持つ実体は一つしか存在せず、他の実体によって限定されることがないのであるから、「すべての実体は必然的に無限である」(P8)ことになる。

第一部定理八までの『エチカ』の叙述から、実体とは本性上存在する無限の存在であることが理解される。だが、ここで注意しなくてはならないことは、ここまでの実体とは、さしあたりは神＝実体ではないことである。[注4] つまり、実体は定義三の内容規定しか受けていない。論述にも神＝実体に言及する箇所はいっさいない。しかも同じ属性の実

体は一つしか存在しえないのであるとしても、異なる属性の実体が複数存在することは論理的に可能である。この種の実体から「無限に多くの属性からなる」実体へと議論が移行していく転換点が、定理九と定理一〇である。

ものがより多くの事象性（realitas）あるいは存在（esse）をもてばもつほど、そのものにはそれだけ多くの属性が帰せられ（P9）、「一つの実体の各々の属性」はそれ自身で考えられねばならない（P10）。一見して明らかなように、定理一〇に至ってはじめて実体は複数の属性をもちうるものとして規定されている。直後に位置するのが、神、すなわち「各々が永遠・無限の本質を表現する無限に多くの属性から成り立つ実体」の存在証明である定理一一であり、これ以降、絶対無限の神の不可分性（P12, P13）や唯一性（P14）が主張されていく。実体についての諸定理が神を巡る諸定理の中に吸収されていくのである。それゆえ、実体と属性の身分関係はひとまず定理一〇までで完成したとみてよいだろう。では、一つの実体と複数の属性はいかにして結びつくのであろうか。

スピノザは定理一〇の注解で「一つの実体に複数の属性を帰せしめることは少しも矛盾していない」という。この注解は実体―属性関係を論じるさいにかならず参照され、事実上神の唯一性の根拠ともなっている重要なものなので、少し詳しく引用しておく。

> 「…たとえ二つの属性が事象的に（realiter）区別される、すなわち、一つの属性が他の属性の助けなしに考えられるとしても、そのために、二つの属性が二つの存在者あるいは二つの異なる実体を構成するとは結論できない。というのは、実体の属性の各々がそれ自身によって考えられることが、実体の本性であるからである。なぜなら、実体の持つすべての属性は常に同時に実体の中にあり、一つの属性は他の属性から産出されることはありえず、むしろ、各属性は実体の事象性や存在を表現しているからである。ゆえに、一つの実体に複数の属性を帰せしめ

ることは少しも矛盾していない。」(E1P10S)

スピノザはこの部分に続けて、定理九を敷衍しつつ「絶対無限の存在者を、その各々がある永遠・無限の本質を表現する無限に多くの属性から成り立つ存在者であると定義しなくてはならないことほど明らかなことはない」と結論づける。この絶対無限の存在者こそ、神であるところの唯一の実体である。自然の中には唯一の絶対無限の実体しか存在しえないことまでもが、この定理の注解に暗示されている(P14C1)。したがって、唯一の実体と複数の、あるいは無限に多くの属性との関係は、スピノザ形而上学全体のなかで次のように規定されていることになる。すなわち、(1)実体は唯一の絶対無限の存在者であり、他に存在するものはない。(2)属性はこの実体の本質を表現するが、それ自身によって考えられる。属性の区別は事象的区別である。[注5] (3)実体は無限に多くの属性から構成されている。

スピノザ哲学の主要な難点の一つがここにある。実体は唯一だが、その本質を表現する属性が無限に多いとはどのように理解すればよいのか。古来からの「一と多」の問題、近代に下っては、とりわけイギリス経験論が尖鋭化した「多様な諸性質とその背後の不変の基体」についての論争と源を同じくする由緒正しいトピックである。この実体―属性論について「古くからほとんどすべての解釈者が、夫々一応の解釈を試みている」[注6]のも十分に納得できるだろう。

この問題の論争史上で解釈の分かれるところは属性の理解に限られる。というのも、スピノザ自身実体という用語に比較して、属性という言葉を様々な文脈で多義的に使用しているからである。また、属性概念こそが、スピノザの神、自然の概念に具体的な独自の内容を注入しているからでもある。属性解釈には、エルトマンとフィッシャーの論争以来大きく区別して、主観的・形式的解釈と客観的・実在的解釈とがある。前者は属性を人間知性に相対的な形式、不変で認識しえない実体の現象であるとみなす傾向がある。これに対して後者は、属性を実在するものと把握し、そ

の存在の客観性を保証しうる解釈を提出する。両者の論争は、スピノザのテキストと整合的なのは客観的解釈であるということで決着を見たとされるが、そのことが逆にスピノザの実体―属性論を理解し難くしている。[注7] 事実、属性解釈をめぐっては現在なお論争は進行中だといってよい。スピノザ自身、実体と属性については時期によって微妙に異なる記述を残している。そこで、『エチカ』執筆以前の著作と書簡に現れる実体―属性論に目を向け、スピノザの発想の原型を確かめておきたい。

第二節　『短論文』の実体―属性論

2―1

『エチカ』以前の著作の中、スピノザの独創といえるだけのまとまった内容を備えている形而上学を提出しているのは『神・人間および人間の幸福に関する短論文』だけである。[注8] この『短論文』では、実体と属性との間には『エチカ』以上に強い結びつきが想定されており、すくなくともこの段階でスピノザは、属性すなわち実体と考えていたと思われる。ところが、『短論文』ではスピノザの用語法はこの時期にはいまだ確定しておらず、動揺している。実体という用語も、デカルト流の有限実体に近い意味でも、スピノザ的な無限実体の意味でも使用されている。つまり『短論文』では実体という用語は二義的に使用されているのである。『エチカ』とは異なるかたちで、しかし実体―属性論という共通の文脈において、実体という言葉は二つの意味をもつ。[注9] しかも『短論文』の場合は、それらの意味は相矛盾してしまう。したがって、本節の考察も二つの実体観に即しながら進めていくことになる。[注10]

『短論文』での神の定義は「各々がその類において無限に完全な、すべてのあるいは無限に多くの属性が述語づけられる存在者」(KV1/2, 1) である。一見すると先述の『エチカ』での神の定義と変わらないようにみえる。『短論文』の叙述順序では、まず第一部第一章で神の存在を証明してから、第二章で「神は何であるか」が論じられるので、存在証明の対象が神であることは明確である。神の定義に「実体」との言葉が登場しない事実もあいまって、『短論文』では本稿冒頭の疑念、つまりスピノザが証明したのはじつは神ではなく実体ではないのか、との疑念は生じえない。

実体の規定としては次の四つが挙げられている。すなわち（1）限定された実体は存在せず、自己の類の中で無限に完全である、（2）二つの同じ実体が存在することはない、（3）一つの実体が他の実体を産出することはできない、（4）神の無限知性の中には、自然の中に形相的に存在しないような実体は存在しない、の四つの命題である (KV1/2, 2)。このうち最初の三つは、対応する定理が先述の『エチカ』第一部冒頭にみられる。（1）は定理八、（2）は定理五、（3）は定理六にそれぞれほぼ同じ内容の記述がある（4）については後にやや詳しく検討するが、さしあたり指摘しておくべきは、第四命題を論証するにあたってスピノザは実体を属性とも述べなおしていることである。すなわち「神の無限知性の中には、自然の中に形相的に存在しないような実体あるいは (of) 属性は存在しない」(KV1/2, 11) と。ところが『エチカ』と同工異曲の実体規定と著しく異なっているのは、この実体は（神の属性と同一視されるものの）必然的には存在しないとされていることである。「われわれは、実体の中には（それでもやはり自然の中に存在しているのは知っているが）、個別的に考えられると (afzonderlyk begrepen zynde)、存在する必然性がないことを知っている」(KV1/2, 17)。この実体観と、実体の本性には存在が帰属する (E1P7) とされる『エチカ』のそれとの懸隔は甚だしい。だが『短論文』に特徴的なのは、属性をまさにその実体と同一視するその属性理解なのであ

る。

『短論文』における属性の定義は、典型的には次のようなものである。

「それによって神が構成されるところの諸属性（eigenschappen）に関しては、それらは各々が自ら無限に完全でなくてはならない無限な諸実体（zelfstandigheeden）に他ならない」（KV1/7, 1 fn.）

この一文では、属性が実体と同一視されているのは疑いを入れない。先に『短論文』での実体には存在が必然的には帰属していないと述べた。すると、引用部分の「無限で完全な無限実体」は、存在するもしないも偶然な実体であることになる。しかし、全知、全能、永遠、万物の原因等々といった伝統的な神の属性を様態にすぎないと喝破し、神をして神たらしめる属性を思惟と延長に求めたスピノザにとって、その属性が神に偶然付与されるにすぎないとは毛頭考えてはいなかった。そもそも、神が必然的に存在する以上、神を構成するはずの属性が偶然にしか存在できないということはありえまい。したがって、属性が実体であるならば、それは必然的に存在するはずである。属性と同一視される実体は、先の実体に関する四命題における実体とな異なっているように思われる。実際『短論文』の別の箇所には、本質に存在が属するような実体についての記述もまた存在するのである。

このもう一つの実体は「付録一」にあらわれる。[注11] この付録はごく短いながら、幾何学をモデルにした叙述形式をとったスピノザの初めての文章である。内容的には先の四命題と多々重複しているが、本節の問題関心から見て重要と思われる部分を引用しよう。

「あらゆる属性あるいは実体は、本性上無限であり、自己の類において完全である」（KV/A1P3）

「あらゆる実体の本質には、本性上存在が属している」（KV/A1P4）

「属性の本質には存在（wezentlykheid）が属している」（KV/A1P4C）

先の属性の定義にこれらの定理と系とを読みこんでいくならば、神の属性はすなわち必然的に存在する実体となる。実体の本性に存在が属するのだから、属性の本性にも存在が属することになる。付録一においては、実体あるいは属性は本性上存在するとされているのである。

このように、『短論文』の実体には、その本性に存在が含まれるもの（四命題）と含まれないもの（付録一）の二種類がある。『エチカ』の場合とは異なり、一方の実体が神となるわけではないが、論脈は共通である。すなわち、神の属性の存在論的身分が両テキストともに問題となっている。問われるべきは、なぜ『短論文』内部で実体の本性に対する規定が大きく変化しているのかである。この問いに答えるには、おそらく『短論文』のテキストだけを分析対象とするのでは足りず、スピノザ哲学の形成史との関連で『短論文』をとらえ返していく作業が必要となろう。[注12] そういった準備はもとよりないが、『エチカ』の実体―属性論へと繋がっていく議論を読みとりうる限りで、解釈を試みたい。

2―2

まず先の四命題で語られていた実体がいかなる仕方で存在するとされるかを検討する。鍵となるのは四命題最後の第四命題である。第四命題は「神の無限知性の中には、自然の中に形相的に存在しないような実体は存在しない」というものであった。そこで述べられている命題内容を言い換えるなら「すべての実体は形相的に存在しなくてはならない」（KV1/2, 2 fn.）となる。というのも、実体は他の実体を産出することができない（第三命題）のだから、現在存在していない実体が今後発生する余地はないからである。ところで、われわれは少なくとも二つの実体、すなわち

思惟と延長の二種類の属性が自然の中に存在していると明晰・判明に認識している。それゆえ、実体は現実に存在しているだけ、あるがままに存在するはずである。この主張は、神が現実に存在するもの以上は創造できないというに等しいので、神の全能に矛盾すると通常の創造論からの反駁を呼び起こす。スピノザもそれを予想し、神は創造しうるものすべてを創造したという自らの主張こそが神の全能にふさわしいという趣旨の回答を示している（KV1/2, 16）[注13]。スピノザは『短論文』の段階では、いまだ超越的な人格神の「無限の力」「単一の意志」「善性」などを自説の根拠にしてはいるが、いわんとするのはいっさいが創造されつくしている、つまり現実に存在する実体以外の実体を認めないというものである。

ところが、個別にみられた実体の本質には存在が属さないのであった。問題は「個別に考えた」の意味と、この実体が登場してくる文脈にある。スピノザは先の四命題を論証した直後に次の帰結を導いていた。

> 「自然についてはありとあらゆることが（alles in allen）述語づけられること、それゆえ自然は各々がその類において完全な、無限に多くの属性からなることである」（KV1/2, 12）

この規定は、神について与えられる定義とその内容をまったく等しくする。それぞれの定義内容が同一であることから、自然と神とが一致していくのである。神の定義では「無限に多くの実体」から神が構成されると述べられていたが、自然についてはそれは「無限に多くの属性」から構成されるといわれている。両者の定義内容が等しいのであるから、やはり属性と実体は同じものを指しているはずである。まさにこの自然の属性に関する論述においてはじめて、実体あるいは属性の存在が問われている。

自然を構成するこれら無限に多くの実体あるいは属性を、われわれは自然の中に明晰・判明に認識できるが、かと

いってそれらが全く相互に無関係であり、完全に独立して存在するわけではないとスピノザはいう。それらはみな唯一の存在者を構成するのであって、無限に多くの異なった存在者となるわけではない。スピノザがあげる根拠は三つある。一つは、すでにあらゆるものが帰属する無限で完全な存在者の存在がすでに論証されていること、さらにわれわれは自然の中に統一性（eenigheid）を認めること、そして最後にあげられるのが先に引用しておいた実体観すなわち、諸実体には存在する必然性がないということである（KV1/2, 17）。第一の根拠は、要するに神の存在証明が第一章で済んでいるということに言い換えにすぎない。重要なのは第二と第三の根拠であり、わけてもそれぞれに付された注である。第二根拠の注では、もし唯一の存在者に関係づけられない異なった諸実体が存在するなら、それらの統一は不可能だと述べられる。というのもそれらは互いに共通なものをもたないからである。思惟実体と延長実体とからわれわれは成立しているのだが、思惟と延長はそれぞれに共通なものをもたず、それだけで明瞭に理解される属性である。つまり両者は事象的に区別されている。思惟しかつ延長する身体をもつ人間が、この事象的に区別された二属性からいかに構成されるのかが、デカルトにその一つの起源が求められる心身論の困難であるが、スピノザはその解決を『短論文』においては自然の統一性に求めているといえる。本節で問題にしている実体論からみると、さきの「個別的に考えられた実体」の「個別的に」の限定句は、思惟実体と延長実体が統一された形ではなく、それぞれ別個独立に捉えられたかぎりで、というほどの意味であったことが理解できる。あるいはこういってもよい。思惟実体と延長実体は「唯一かつすべてである存在者」（KV1/2, 17 fn.）の属性である限りでのみ、存在するのだと。

以上をまとめておく。

（1）自己の類において完全な無限に多くの属性から成る存在者は必然的に存在する。この定義内容は神と自然の双方

にあてはまるので、神あるいは自然は必然的に存在する。

(2) 自然は統一されているので、それを構成する属性も統一されており、別個独立に存在することはない。

(3) 自然を構成する属性は、限定されない実体である。だが実体は別個独立に捉えられるならば、必然的に存在するとはいえない。

(4) 実体はなんであれ他の実体から産出されず、他の実体を自らの存在の原因とはしない。すべての実体は形相的に存在する。

(5) それゆえ実体は存在について実体以外の他のものに依存する。[注14] それは必然的に存在する存在者つまり神あるいは自然である。実体は神あるいは自然の属性である限りで、限定されない実体として存在しうる。

2—3

こうして、必然的に存在するわけではなかった実体は、神あるいは自然の属性として存在することになる。それではこの実体と、付録一での本質に存在が属している実体とはいかなる関係にあるのか。私はこれら二つの実体観の相異を、スピノザがその哲学を体系化していく過程に伴う概念上の変遷であると考える。すなわち、最終的には『エチカ』に結実するスピノザ形而上学に向けて、『短論文』のテキスト内部において、概念のいわば換骨奪胎が遂行されているのだと。[注15]

先述の実体の必然的存在を論証する大前提は、神の存在であった。実体は自然の属性としてはじめて存在するとの結論が導かれているにもかかわらず、自然の存在が前提にされるのではない。自然は「原因から生じるのではないが、

にもかかわらず、われわれはそれが存在すると確かに知っている」(KV1/2, 17) のではあるが、だからといって特別にその必然的存在が論証されているわけではないのである。あくまでも第一章で証明されたのは神であった。実体が自然に中で統一されてのみ存在することを論証したときに、第一の前提となった「すべてが帰属する無限で完全な存在者」とは、すでに存在証明が済んでいるとされるからには、神でしかありえない。だが、第二章の表題「神とはなにか」の主要な結論は「神とは自然である」だったはずである。そうすると、わざわざ神の存在を別立てで証明し、その創造や善性に依拠するかたちで実体や属性を論じていくのはいかにもまわりくどい。[注16] 神と自然とが定義内容を等しくするから、両者は同一であり、それゆえ自然は必然的に存在する、そして実体はこの自然の属性として必然的に存在する。この論証においては、神は必然的に存在するだけでよく、その本質規定は（自然と同一だという点を除くと）いっさい関与していない。しかも神と自然とが同じ定義内容を共有すること自体は自明とされ、取り立てて論証されるわけでもない。あえて論証となる部分があるとすれば、先の四命題から成る実体論であろう。その実体論が当面の完成をみるのは、実体が自然の属性としてしか存在しえないとの論証されるときであって、再三確認しているように、そこでは神の存在は前提にされていたのである。

たしかにスピノザは「不可識別者同一律」に類する原理を『短論文』で明示的に主張するわけではない。したがって、存在者として神と自然の二つを認めることも可能かもしれない。しかし、神も自然も「無限に多くの属性から成る存在者」であって、「二つの無限なもの (twe oneyndelyke) はありえず、そうしたものはただ一つ (Een Eenig) だけであることは…明らかである」(KV1/1, 9) のだから、そういった可能性は排除されている。自然と神とが同一であるならば、存在証明は自然のそれであってもよいはずであろう。なるほど自然の存在証明とは奇妙な響きがある。

だが、神はもはや自然に付与されたある種の別名にすぎない。そもそも、第一章においてさえ、神は無限に多くの属性をもつという規定からの存在証明があったのである（KV1/1, 3 fn.）[注17]。この証明手法が自然にも妥当するのは言うまでもない。要するに、超越神の存在証明を介しての実体論は、迂遠であるのみならず、端的に不要なのである。

無限に多くの属性あるいは実体からなる存在者の必然的証明だけが求められているのであって、その場合、方針としては四命題の延長が考えられる。つまり、自然を構成する実体が限定されない実体であるとの主張を起点に、論を組み立てなおすのである。スピノザは実際にこの方針を採用したのだと思う。幾何学という方法をも用いて、自然を構成する実体あるいは属性が必然的に存在し、しかもそれ以外には何の本質も存在もありえないことを論証して、それをもって自然と神とが同一であると結論づけたのが付録一の方針なのである。この方針の一環として、自然を構成する実体の本性に存在が承認されたのであろう[注18]。つまり、論証手法の精緻化（あるいは幾何学化）に伴って実体観の転換が生じたのである。

『短論文』における実体―属性論についてはここまでの記述で十分であろう。『エチカ』と比較すると、実体が属性と同一視されていることはより明確である。また本文と付録一との間では実体観に動揺がみられるものの、その本性に存在が帰属している付録一での実体も、『短論文』全体の論旨を勘案すると十分に理解できる。この二点を確認して満足したい[注19]。

第三節　属性解釈の論争から「発生的定義」へ

3―1

前節で検討したように、初期の著作に限れば、スピノザは属性と実体とを同一視していたといえる。したがって、『エチカ』以前においては属性の客観的解釈が妥当であるといえよう。スピノザが終生一貫して属性に同じ定義を与え続けていたのであれば、『エチカ』においても属性の客観的解釈を安んじて採用できるだろう。だが『エチカ』での属性の定義には「知性が実体に関してその本質を構成すると知覚する」との文言が含まれている。この部分を典拠にして、人間の知性が把握できるのは属性だけであり、実体そのものは不可知の基体であるとの主観的解釈が生じてきた。エルトマンとフィッシャーの論争以後、属性の主観的解釈の陣営にたつ研究者としてウォルフソンがいる。ウォルフソンはエルトマンらの論争内容にコミットすることなく、中世ユダヤ哲学史の教養を基礎として、彼独特の属性解釈を提出している。本節ではウォルフソンの主観的解釈を紹介し、それを批判的に検討することを通じて『エチカ』における属性概念の明快な理解を獲得することを目指す。

ウォルフソンは、スピノザが属性について主観的解釈を取っていることは、スピノザ哲学の思想史的背景から明らかだという。ウォルフソンによれば、神とその属性を巡って中世にユダヤ哲学者の間で論争が起こっていた。神の本質的属性を名目的に解釈するのか、それとも実念論的に解釈するのかがその争点である。スピノザはこの論争に加わったユダヤ哲学者の著作を知悉しており、それがスピノザが神・実体の属性を主観的に把握していたことの傍証となる

というのである。具体的には次の三点がテキスト上の根拠である。[注20]

(1) フリース宛ての一六六三年の書簡でスピノザは、実体と属性の定義に関するフリースの疑問に対して次のように答えている。すなわち、実体と属性は同じものだが、属性は「実体にある一定の本性を帰する知性に関連して(respectu intellectus)」のみ属性と呼ばれる、と (Ep9/45-46)。

(2) スピノザが属性に言及する際に、実体を「知覚する」「表現する」「説明する」などの主観的な用語を用いている。

(3) 結局、実体が複数の事象的に区別される属性からなると主張する第一部定理一〇注解は「二つの属性は精神には相互に区別されて現れる。しかし、実際はそれらは一つなのである」と読まれねばならない。「属性とは、実体の同一の事象性と存在を表現している、異なる言葉にすぎない」[注21]。

属性が有限な精神によって知覚されるだけの主観的性格しか持たないのだから、実体の単純性・均質性を脅かすような実在性は属性には否定される。ゆえに、定理一三が「絶対的に無限な実体は不可分である」と結論づけるのである。

たしかに以上のような解釈によれば、属性と実体の関係を首尾一貫して把握できるだろう。しかしながら、ウォルフソンの解釈は、彼のユダヤ哲学史の造詣が先入見となって、正確なスピノザ哲学の理解を妨げたものといわざるをえない。ウォルフソンの主観的解釈を決定的に批判したのがゲルーである。

ウォルフソンに限らず、主観的解釈の提唱者に共通なのは、属性を人間知性の理解能力に相対的な現象とみなしてしまい、実体の真の在り方から引き剥がしてしまうことである。ウォルフソンの解釈の根拠の最初の二つも、この共通の属性観に依拠したものである。しかし、この解釈はスピノザ哲学における知性の働きに対する全くの誤解に基づ

いている。ゲルーの指摘をまつまでもなく、スピノザのいう知性や理性の本性は「ものをあるがままに（ut in se est）知覚する」（E2P44D）ことにある。[注22] したがって、知性が「知覚」し「表現する」本質は、「あるがままの」実体の本質なのである。[注23] ことは人間知性の認識能力の及ぶ範囲の確定だけにはとどまらない。人間の精神は、ものを真に知覚する、すなわちものをあるがままに知覚する限りで、神の無限知性の一部なのであるから（E2P43S, P44D）。しかも、人間精神における明晰・判明な観念が神の無限知性における観念と同じであることは、スピノザ哲学の最高の獲得目標である「神の知的愛」への通路を保証するものでもある。属性の主観的解釈の前提である知性観は、単に誤解であるばかりではなく、スピノザ哲学と完全に背馳している。

さらに、ゲルーはウォルフソンの解釈の根拠となるフリースへの手紙は、逆にウォルフソンへの反駁と読まれるべきであるという。[注24] スピノザはその手紙の末尾で実体と属性の定義を再確認する。

「実体とはそれ自身においてありそれ自身によって考えられるもの…と解する。属性を同じものと解する（Idem per attributum intelligo）、ただそれは実体にある一定の本性を帰する知性に関連してそう呼ばれるだけである。」（Ep9/46）

スピノザがこのくだりで注意を喚起しているのは「属性とは実体の一つの側面である」とか「実体が実在するもので、属性はその名前である」ということではない。「実体と属性とは、同じものである」ことをスピノザは思い起こさせているのである。引用部の直後に「実体、すなわち属性（substantiam sive attributum）」という表現があること、さらに「まったく同一のものが二つの名前で呼ばれること」の実例として、「イスラエルとヤコブ」「平滑と白」が挙げられていることから、スピノザの言葉の意味は明らかである。スピノザはイスラエルという人の別名としてヤコブ

をあげているのではなく、それらが一人の人間にあてはまる二つの名前だと述べているのである。

第一部定理一〇注解の解釈についてであるが、そこで言及されている属性の区別は、本当ならば区別しえないものの、知性に対してだけ区別されて現れるという種類のものではない。属性は「自己の類のおいて完全」であり、その意味で無限定なのである以上は（Ep36/185）、そもそも実体をその外部から限定するはずもない。

「知性の外には、実体あるいは同じことであるが（quod idem est）（定義四により）、その属性と属性の変様しか存在しない。」（E1P4D）

神や実体をそれらの属性と同一視している箇所はここに引用した部分の他にもいくつかあるが、ウォルフソン批判の最後として、彼が主観的解釈を試みている当の定理一〇の証明を引用しておこう。

「なぜなら属性とは、知性が実体についてその本質を構成するものとして認識するものである（定義四より）。したがって（定義三より）それ自身によって認識されねばならない」（E1P10D）

証明の前半部分は属性の定義を再確認しているにすぎない。後半部分の「それ自身によって認識されねばならない」は実体の定義の一部をそのまま抜き出して引用している。つまり、スピノザはここで属性に対して実体の定義を無条件に適用しているのである。スピノザが属性は実体であると考えていなければ、この証明が書かれるはずはない。[注25] これらから明らかなように、スピノザは実体と属性を同じものと考えていたのである。

ドナガンの言葉を借りれば、スピノザの属性の「革命的な着想」は「デカルトが区別される有限な本質を表現するとみなした二つの属性が、実際は、各々が永遠・無限の本質を表現する」[注26]点にあり、そのゆえに神と同様の存在を持つのである。

「神とそのすべての属性は永遠である、すなわち（定義八より）、各々の属性は存在を表現する。……、神の本質を構成するもの自身は、同時に神の存在をも構成する。……」（E1P20D）

定理二〇証明では属性が「それ自身によって認識される」といわれ、定理二〇証明ですべての属性は神と同様に存在する、すなわち「それ自身によって存在する」ことが示された。このように「それ自身において存在し、それ自身によって考えられるもの」という実体の定義が、そのまま属性にも妥当するのだから、「属性は根源的に異なる仕方での、同一の実体」[注27]であると考えることはスピノザのテキストから自然に導かれる結論である。[注28]

スピノザの属性の客観的解釈が支持されねばならないのはもはや明らかである。[注29]属性と実体とを切り離して考えることはできない。実体にあてはまる諸規定は、いずれも属性にもあてはまるのだから。[注30]だが依然として問題は残る。実体と同一視されるような属性は事象的に区別されるのである。無限に多くの属性によって構成される実体と、事象的に区別される属性との関係はいかなるものであろうか。唯一の実体と無限に多くの属性という問題は、属性の客観的解釈が確立されたことにより、解決不能に陥ってしまったかにみえる。議論は切実さを増して、ふりだしに戻る。

3—2

属性解釈上の困難に対して、ゲルーが与えた有力な解決策が神の「発生的定義（definiton génétique）」である。ゲルーによれば、第一部定理一から定理八までの実体とは「唯一の属性をもつ実体」である。具体的には、定理八証明のsustantia unius attributiを「唯一の属性をもつ実体」と解釈し、これを典拠としていく。[注31]「定理一から八は、神の本質を構成する諸要素、すなわち唯一の属性をもつ実体の演繹を」正確には「唯一の属性をもつ実体の概念の演繹を」

遂行しているのであり、それゆえ実体という単語があるときは単数形で、またあるときは複数形で用いられるのである。[注32] その一方で定理九から定理一五で問題となるのは、単純な諸要素である「唯一の属性をもつ複数の実体」から神を構成することである。これら無限に多くの諸実体から構成されることで、神は無限に多くの属性からなる一つの実体として認識されることになる。[注33] 第一節で引用しておいた定理一〇注解を経ることで、すべての属性を帰属させうるような唯一の実体の存在可能性が確保される。この想定に最高に完全な存在者である神の観念が定理一一で付加されることをもって、「自己の類において無限」である唯一属性の実体から、「絶対無限の存在者」である神が構成されるとゲルーは主張する。換言すれば、無限に多くの属性によって、唯一の神が構成されるのである。

ところで「発生的定義」とは、デカルトではなくホッブズの幾何学を範例とする定義である。[注34]『知性改善論』での具体例との対比で簡単に説明しておこう。円を「一端が固定し他端が運動する任意の線によって描かれた図形」と定義する場合、この定義は発生的である（TIE 96）。というのも、この定義は円の「最近原因（causa proxima）」（『エチカ』執筆期に書かれた書簡での表現では「起成原因（causa efficiens）」）を表現しているからである。この定義からは円のすべての特質が導かれる（Ep60/270-1）。球を「半円が直径を軸に回転して生じる」ものとする定義も同様に発生的である。半円の運動は、それが球の概念と切り離されて考えられると、偽となる。というのも、そのときに精神は半円の運動を肯定することにのみ向けられていることになるが、半円の運動は半円の概念に含まれてもいなければ、その運動を規定する原因から生じているわけでもないからである。しかし、半円や運動、量といった単純な思惟あるいは観念は、それが含む肯定がその概念と完全に一致するので、必ず真である（TIE 72）。ゲルーによれば、これらの単純な観念の限界を超えた肯定が必要となるのは、それらを構成要素とする複雑な観念を考察する場合である。つま

り、球という複雑な観念を構成する諸要素として半円や運動という単純な観念が総合されていくとき、それらは球の観念の統一のうちに位置づけられて、新たな意味を獲得するのである。単純観念を総合していく「構築法則（loi de structure）」は、もちろん定義さるべき球の観念である。[注35]

ゲルーは、この球の定義と神の定義との間に、以下のような平行関係を見て取っている。球が半円の回転によって生み出され、すべての諸性質が演繹できるのと同様に、神は無限に多くの属性から生み出される。そしてそこから「神が存在するというもっと根本的な性質」をはじめとしてすべて諸性質が演繹されるのである。半円の回転という観念が、球の観念と切断されて考えられるときには偽であったのと同様に、無限に多くの諸属性とその総合という概念も、無限に完全な存在者の概念から離れて孤立して把握されるならば、やはり偽となる。というのも、属性の概念自体には、無限の多さもそれらの必然的な総合も含まれていないからである。半円の回転という観念が、構成要素として球の観念に組み込まれていかねばならなかったように、無限に多くの属性とそれらの総合という概念も神の概念に結合されなければ十分には理解されえない。こうして神の発生的定義において、属性すなわちゲルーのいうところの「唯一属性の実体」は、神との関係においては単純な構成要素としてのみ無限に多く存在し、同時に総合されていくことが論証される。[注36]

このような「発生的定義」は、テキスト解釈としては寸分の隙もないようにみえる。唯一の実体と無限に多くの属性との関係を、属性が実体を構成していくプロセス、すなわち神＝実体の自己生成運動として捉えかえしていく手際は見事としかいいようがない。本稿の問題設定に即していえば、定義三の実体が唯一の属性をもつ実体として規定を受け、それらが定義六の神＝実体に無限に多くの構成要素として帰属するというわけである。しかしながら、ゲルー

の解釈をここまでは承認するとしてさえも、なお問われるべきは「唯一属性の実体から神＝実体への移行」が本当に可能であるのかという問題である。換言すれば、無限に多くの属性が、いかにしてまたどのような意味で、唯一の実体において統一されているのかという問題である。次節ではこの点を、再び初期の書簡にも立ち返りながら考察する。

注1　Marion [1991] p. 61.

注2　たとえば「必然的存在者がどのような性状をもち、その現存在がその存在者にどのような仕方で結びつくのか洞察ができていないときに、必然的存在者について語ったり、その現存在を想定したりすることは果たして有意味なのか」（ヘンリッヒ [1986] 五〇―一頁）という当惑である。

注3　この解釈方針はゲルーの研究書冒頭から明示され、第一部として分量的にも約半分の頁がこの解釈を正当化するために費やされている（Gueroult [1968] p. 19.）。

注4　このように『エチカ』冒頭の一五の定理群を区別すること自体が、実はゲルーの考案でもある（Gueroult [1968] pp. 109-11.）。このゲルーの区別に対してマシュレはほぼ全面的に賛同する（Machrey [1990] p. 112.）。もっとも、ゲルーだけがこの区別をしているというのは言い過ぎである。たとえばドゥルーズは独自に『エチカ』第一部の定義をも含めた冒頭部の見取り図を書いているが、定理一から八までとそれ以降の諸定理を区別する点ではゲルーと同様である（Deleuze [1968] pp. 30-1, p. 65.）。

注5　cf. A. T. VIII 28. 詳しくは第五節5―1参照。

注6　桂 [1956] 一二三頁。

注7　エルトマンとフィッシャーとの古典的ともいうべき論争については、本稿ではこれ以上扱わない。すでに決着を見た論争であること、さらには邦語文献で必要な限りの内容紹介がなされていること、これら二点が理由である。桂 [1956] 一二三―六頁、河合 [1994] 三四一―四頁参照。cf. Gueroult [1968] pp. 431-3, 455-9.

注8　従来この『短論文』がスピノザの最初の著作と見なされてきた。ゲープハルト版著作集の編纂順序においても、『短論文』を第一巻巻頭においている。ところが、近年の文献学的研究の進捗にともない、スピノザの著作の成立時期をめぐって、定説に疑問が提出さ

れるようになっている。中でも注目されるのは、スピノザの最初の著作は『短論文』ではなく『知性改善論』ではないかというミニーニの新説である。それによると『知性改善論』の執筆時期は一六五八～九年と推定され、その後一六六〇～一年にかけて『短論文』が書かれたとされる。ミニーニ説の紹介として、佐藤［2000］を参照。また、カーリーはミニーニ説を受け入れて、彼が翻訳・編集する英訳著作集の編纂順序では、『知性改善論』を『短論文』以前の著作としている（Curley［1985］, esp. pp. 46-53）。さらにカーリーは『短論文』と『エチカ』に共通の心身関係の教義を探索し、次の結論を得ている。それによれば、『エチカ』には、心身相互作用の否定、平行論、精神は身体の観念であること、精神は神が身体についてもつ認識であること、心身の同一性の肯定の五つのテーゼがあるが、『短論文』には最初と最後のテーゼを除いて、残りの三つの萌芽が存在している。これをもって、カーリーは『知性改善論』が『短論文』以前に執筆されたと推定する一つの根拠にしている。『知性改善論』には『短論文』と『エチカ』に共通する心身関係論とは整合しない議論が含まれており、そこからスピノザの思考形成上の変化を読みとりうるからである（Curley［1988］p. 14.）。私にはテキスト・クリティークに関わる問題は手に余るので、これを度外視する。『エチカ』を主たる検討対象とし、他の著作を傍証として扱う本稿の方針からは許されるとおもう。

注9　あるいは実体―属性関係についてテキスト上は「ほとんど決定的なことはいえないようにみえる」（Laciéze-Rey［1950］p. 99.）かもしれない。たしかに、実体と属性についての『短論文』での論述は、本節で紹介する以上に錯綜している。実体の意味を二つに限定するという整理自体が、強引な簡略化だとの批判は十分にありうる（cf. Laciéze-Rey［1950］p. 98.）。とはいえ、テキスト解釈が定まりがたいからこそ、特定の文脈を設定する意義があるともいえる。本節ではあくまで、後の『エチカ』で反復されるとおもわれる構図に絞って、『短論文』の実体―属性関係を探る。『短論文』全体の解釈として欠陥をはらむ可能性は否定できないが、牽強付会には陥っていないはずである。

注10　このあいまいさは『短論文』の過渡的性格に帰せられるかもしれない。だがじつは『エチカ』においてさえ、実体をデカルト的な意味で用いるという用語上の混同は散見される（E1P15S）。また属性も『短論文』では様態（wyzen）とみなされる場合がある。たとえば、たぶんに対人論法の色彩が強いが、第一部「第一対話」第九節参照。

注11　属性と実体を、ほとんど同じものであるかのように語る箇所は、このほかにもいくつか存在する。たとえば「実体的思惟（zelfstandige denking）」「実体的延長（zelfstandige uytgebreidheid）」（KV2/Vr, fn.）、「……われわれ自身、実体的である（zelfstandigheid

zyn）と認めている諸属性なしには、……」（KV2/V1, 4）。cf. KV1/7, 10

注12　第一部に限っても、実体や属性、様態といった用語の使い方、神の存在証明の手法、人格神による創造に依拠する議論と汎神論的傾向との緊張など、微妙な論点が散在している。これらのどこまでが初期思想に固有で、スピノザの哲学体系の成熟にともなって廃棄されていくのかを子細に腑分けしていかないと、『短論文』の実体の本質規定の振幅を正確に測ることはできない。したがって、スピノザにとって「これら三つの概念――神、自然、実体――は最初から同一である」（Ben-Shlomo［1991］p. 223.）のか、それとも、この時期には神と自然を同一視していたが「『エチカ』とは違って、神と実体を同一視していなかった」（Guerout［1968］p. 426.）のかについて、判断を下すことはできない。前者に対しては、本節で紹介してきた実体という言葉の多様な用法が反証となるだろうし、後者に向けては「というのも、自然全体はただ一つの実体（zelfstandigheid）なのだから、……」（KV2/22, 5）という文言を指摘しておく（もっともこの「第三の」実体について本節ではこれ以上論究できない）。

注13　これとほぼ同一の論旨は『エチカ』でも繰り返されている（E1P17S, P33S2）。

注14　ここの論証には、以下の第一章での議論がふまえられていると解釈しておく。そこでスピノザは、一種の神の存在論的証明を試みている。神の観念がわれわれの虚構ではありえず、それゆえその観念の原因として神が存在するという形式の証明である。そのさいスピノザは付随的に観念を、その対象が存在しうるか、存在するとすれば必然的にそうか否か、を基準に区別している。スピノザによれば、観念の中にはその対象が存在することが可能であるが、必然的ではないものがある。たとえば三角形の観念がそれである。私がもっている三角形の観念は、三角形の本質が必然的であり（たとえば内角の和が二直角である）、誰にとっても同じなのだから、私が虚構した観念ではありえない。そうした観念はそれゆえ、私の外に私以外の、それがなくては観念が存在しえないような「主体・基体（subjectum）」（KV1/1, 8 fn.）あるいは外的な原因をもつはずである。ところで、われわれは実体あるいは属性の観念をもっており、その本質は必然的であり虚構ではありえない。だが実体あるいは属性は、個別的にみると、存在する必然性がない。それゆえそれらは、それなくしては存在できない一つの主体・基体をもつ。換言すれば、それらは存在するためにある原因を必要とする。

注15　「付録一」と称されるテキストが、本当に『短論文』の付録だとすると、との限定をつけておこう。このテキストの考証を巡る論者の見解については、当該箇所の英訳に付された注（Curley［1985］p. 150, fn 1.）を参照。

注16　神の無限知性にその観念が含まれている実体と、形相的に存在する実体とは、過不足なく一致していた。それはつまり、神の認識

能力と、創造をなす活動能力との間には不均等がいっさいないことを意味する。ゲルーによれば、この場合創造論に不可欠のはずの「創造主の自由」には、事実上存立の余地がないという（Gueroult [1968] p. 482）。このように創造する神が事実上不要になるのであれば、神を介在させて実体の必然的な存在を保証するという方針も余計であろう。

注17　ちなみに、この論証は無限に多くの属性には存在も含まれるがゆえに、無限に多くの属性をもつ存在者は存在するという存在論的証明の典型的なパターンである。スピノザの他のテキストにはこの論証パターンは不在である。

注18　付録一と『エチカ』における実体論との継承関係については、幾何学をモデルにした論証手法という観点からゲルーが論じている（Gueroult [1968] pp. 484-7.）。

注19　『短論文』以外の初期の著作における実体―属性論については、次の二箇所にだけ注意を促しておく。スピノザは一六六一年のオルデンブルク宛て書簡において、属性の定義「それ自身によって、またそれ自身において考えられるもの」からその存在が導かれると述べている（Ep4/13, cf. Ep2/7）。属性の本質に存在が帰属するとの見解は、おそくとも一六六一年段階にはスピノザの確信となっていたのではないかと推定される。もう一つは一六六三年刊行の『デカルトの哲学原理』である。そこでスピノザはもっぱらデカルトの著作を祖述しつつも、「実体を創造することあるいは維持することは、実体の属性あるいは特性を創造することあるいは維持することよりも、いっそう大なることである」（A. T. VII, 166）との公理に対して留保をつけている（PPC1P7S）。スピノザは実体と属性との間に理性的区別だけを認めようとしているのである。二点いずれも実体と属性とが、存存在者としては同一であるとスピノザが考えていたことの傍証となろう。

注20　Wolfson [1934] pp. 151-7.

注21　Wolfson [1934] p. 156.

注22　Gueroult [1968] pp. 435-6.

注23　ibid.

注24　Gueroult [1968] p. 438.

注25　see Jarrett [1977] pp. 452-3.

注26　Donagan [1973] p. 172.

注27 Gueroult [1968] p. 167.

注28 ハスロットは、ウォルフソンを徹底して批判し、客観的解釈を支持している。その論拠はおおむね本節でのそれと重なるが、ひとつだけ重要な批判点を紹介しておく。ウォルフソンによれば、実体は絶対的に単純で、本質的な属性から自由である。それでは属性の「無限の多さ」はなにに由来するのか。それは「知性に本来備わる認識形態」から生じるしかなく、それゆえウォルフソンの主観的解釈は結局は複数の属性を「精神がこしらえたねつ造物（invention）」に貶めてしまうのである（Haserot [1972] pp. 38-9., cf. Wolfson [1934] p. 116.）。

注29 現在なおウォルフソンを擁護する論者は、管見のかぎりベネットぐらいである。しかしベネットの本意は、彼独特の属性貫通的（trans-attributes）様態論にあり、論脈としては平行論解釈に属する（Benett [1993], esp. pp. 17-8., p. 24.）。異なる属性のもとの様態がいかにして同一性といえるかについてのベネットの解釈は、それ自体検討に値するであろうが、属性論としてはウォルフソンと全く同じ欠陥をもつ。cf. Della Rocca [1996] p. 163.

注30 スピノザは一六六六年のフッデ宛て書簡（Ep35/181-2）で必然的存在（necessaria existentia）を含む存在者（Ens）の特質を六つあげているが、ブンヘはそのうち五つは属性にもあてはまるという（Bunge [1995] p. 8.）。若干の補足を加えて整理しておく。

1 「永遠である」

「神あるいはすべての属性は永遠である（Deus, sive omnia Dei attributa sunt aeterna）」（E1P19）と「神あるいはすべての属性は不変である（Deum, sive omnia attributa esse immutabilia）」（E1P20C2）から属性にも妥当する。定理二〇系一は神の存在と本質が永遠の真理であること（C1）を根拠に証明されているので、不変とは永遠の文字通りコロラリーである。

2 「単純であり、部分から構成されてはならない」

「実体の可分性を帰結するような実体のいかなる属性も考えることはできない」（E1P12）、「……、いかなる物体的実体も不可分である（nullam substantiam corpoream esse indivisibilem）」（E1P13C）、同定理注解と定理一五注解一とから、これも属性とりわけ延長属性に妥当する。

3 「限定されず、ただ無限なものとしてのみ考えられる」

神は無限に多くの属性から成り、各々の属性は「神の永遠無限な本質を表現する」（E1Def6）のだから、これも属性にも当ては

まるはず。属性と神との違いは、その類において無限か、絶対的に無限かにあるのであって、無限なものであることにかわりはない。

4 「不可分である」

第一部定理一五注解において、延長属性の不可分性が論証されているので、これも属性に妥当する。

5 「純粋な完全性のみを表現する」

「ものがより多くの事象性あるいは存在をもてばもつほど、それだけ多くの属性がそのものに帰せられる」(E1P9)から、属性と完全性とは比例関係にある。それゆえ属性は完全性を表現する。スピノザにとって「事象性と完全性とは同じもの」(E2Def6)と理解されるので。

注31 もちろんゲルーの翻訳(と解釈)に反対する論者もいる。see Misrahi [1993] p. 334. ゲルーの解釈を高く評価するマシュレもこの読みに関しては一貫して反対している。「テキストを注意深く読めば理解できるのだが、スピノザは、複数の諸実体が唯一の属性をもつとの事実をよりどころにして切り離されかつ同定もされる、という仮説を確証するようなきっかけを決して与えてはいない」(Macherey [1998] p. 80. fn 1.)。see Macherey [1990] p. 126. 私も後述する理由からこの見解に賛同する。

注32 Gueroult [1968] p. 109.

注33 ibid.

注34 Gueroult [1968] p. 33.

注35 Gueroult [1968] pp. 170-1.

注36 Gueroult [1968] pp. 171-2. 『知性改善論』では最近原因からの球の定義は被造物に適用されている(cf. TIE 97)。したがって創造されず「原因をもたない」神には同じ論法は通用しないとの反論がありうるが、ゲルーは次のように反論する。神は原因をもたないのではなく自己原因であって、それゆえその原因は「外的原因や最近原因におとらず、原因による発生的定義を基礎づけるのに適している」(Gueroult [1968] p. 173.)。cf. Rousset [1992] p. 390.

ゲルーの提案する「神の発生的定義」の魅力を、ヘーゲルのスピノザ批判に反批判を加えつつ、マシュレが余すところなく記している。「自己原因とは、実体が、自らの現実存在の基礎でありまた自らを構成する諸本質から出発して、自分で自分を生み出していく

プロセスにほかならない。この運動がついにはその活動の産物としてあるいは自己規定の結果として実体を産出する。……、スピノザの実体は、その内在的な生命において――ヘーゲルは「死せる実体」と言い続けるが――自分へと向かう運動、自己の肯定なのである。」(Machery [1990] p. 113.)

凡例

『エチカ』をE、『神・人間および人間の幸福に関する短論文』をKV、『知性改善論』をTIE、『デカルトの哲学原理』をPPC、『形而上学的思想』をCM、書簡をEpとそれぞれ略記する。テキストは、『短論文』以外はゲープハルト版を、『短論文』はMignini編集の蘭―伊対訳を使用。ただし、文意のとりづらい『短論文』オランダ語原文の読みについてはもっぱらCurley [1985] に依拠した。

Gebhardt (ed.), *Spinoza opera*, 1925 (Heidelbeg: Carl Winter).

Mignini (ed.), *Korte Verhandeling/Breve Trattato*, 1986 (Roma: Japadre).

引用に際して、『エチカ』と『デカルトの哲学原理』では以下のように省略している。

E1, 2 etc.=『エチカ』第1部、第2部等、Praef=序文、Def=定義、P=定理、D=証明、C=系、S=注解、Ax=公理、Post=公準、L=補助定理、Ex=説明、

『短論文』と『形而上学的思想』の引用部は次のように略記する。『短論文』第二部の序文はKV2/Vrとする。

例　KV1/1, 2=『短論文』第1部第1章第2節

『知性改善論』ブルーダー版による節番号のみを記す。

書簡はEpと略記し、ゲープハルト版の続き番号を付し、その直後に必要に応じてゲープハルト版第4巻の頁数を記す。

デカルトとライプニッツの著作集は以下のものを使用し、それぞれA. T.、G. P.と略記し、直後にローマ数字で巻数を、アラビア数字で頁数を付す。

Œuvres de Descartes, publiées par C. Adam et P. Tannery, 1964-75 (Paris: J.Vrin).

Die philosophischen Schriften von G. H. Leibniz, hrsg. von C. J. Gerhardt, 1875-90(Hildesheim: Olms).

（文献表は(2)にまとめて記す）